

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22610008

研究課題名(和文)現代の子どもの精神や行動の発達のアンバランスさの解明と環境要因の影響の検討

研究課題名(英文)Changes in preschool children's mental development in Japan since 1954

研究代表者

郷間 英世(Goma, Hideyo)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40234968

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：現代の子どもの発達の様子や問題点を探るため、過去50年間の発達検査の資料の検討、および、保育園幼児の認知発達や社会生活能力の検討を行った。標準化資料の50%通過年齢や項目別の年齢別通過率の検討の結果、1954年から1983年にかけては、子どもの精神発達が促進した時代、1983年から2001年にかけては、発達が遅延してきている時代と考えられた。また、現代の幼児の発達は、認知能力は男女差を認めなかったが、社会生活能力や描画発達は男児で女児より遅れると言う結果が得られ、最近の発達障害や「気になる子」の増加と関連があると考えられた。

研究成果の概要(英文)：We investigated trends in the mental development of children for the past 50 years in Japan. We compared the 50%-passing ages and the passing rates of standardization test data for each item. The period between 1954 and 1983 saw an acceleration in children's development, but this showed down for the period between 1983 and 2001. These results indicated that the mental development of children have been changing as time has passed because of changes of circumstances. And in another investigation of modern preschool children, we found sexual differences on social development such as communication and group behavior.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：子ども学(子ども環境学)

キーワード：子どもの発達 発達検査 発達のアンバランス 発達障害 発達の性差 描画発達 社会生活能力

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代は子育て・子育てが難しい状況にあるといわれている。子どもたちの様子を見ると、落ち着きのない、困難から回避する、容易に「キレル」など、感情の不安定さや衝動コントロールの弱さを持った子どもが目立ってきている。しかし、子どもの詳細な実態や原因についての実証的な研究報告は少ない。

(2) 我々は、子どもの発達の時代的変遷や現代の子どもの社会性や行動発達の問題点や対応についての研究を行ってきた。これまでに、新版K式発達検査の標準化資料を用いて、現代の子どもは20年前の子どもと比較すると、発達が全体的に遅れてきており、その遅れは幼児期に著明であること、発達の遅れは特に描画能力が目立ち、三角形模写では約8か月、ひし形模写では12か月遅れてきていること、遅れは男児でより著明であることなどを報告してきた。また、幼稚園や保育園には発達障害の特徴を持った「気になる子」が多数存在し、対応に苦慮していることなどを明らかにしてきた。

2. 研究の目的

本研究では、1)1950年代の標準化資料も加えて、最近50年間の子どもの精神発達の変遷について明らかにすること、および、2)現代の子どもの精神発達および社会性や行動の発達や問題点について検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)1983年や2001年の資料に1954年の資料を加えて、新版K式発達検査の各検査項目について、年齢別通過率(各年齢ごとの課題に合格した割合)や50%通過年齢(半分の子どもが合格する年齢)を求め比較検討した。

(2)保育園の幼児を対象に、知的発達の指標として新版K式発達検査を、描画発達の指標としてグッドイナフ人物画知能検査を、社会性や行動の指標としてS-M社会生活能力検

査を、問題行動の指標としてCBCLを、また生活習慣の検査を行った。海外との比較として、ナイジェリアの子どもの生活習慣や人物画知能検査テストなどを行った。

(3) 倫理的配慮

保育園幼児の検査や調査について京都教育大学倫理委員会の承認を得た後、保育園長および各保護者の文書での同意を得た。

4. 研究成果

(1)最近50年間の子どもの精神発達の変遷

1歳から11歳の109検査項目の50%通過年齢の検討の結果、1954年から1983年にかけては「認知・適応領域」、「言語・社会領域」とも50%通過年齢が低年齢化した項目が多く(全体の77.1%)、子どもの精神発達が促進した時代と考えられた。一方、1983年から2001年にかけては、両領域とも50%通過年齢が高年齢化した項目が多く(全体の67.0%)、発達が遅延してきている時代と考えられた(図1)。

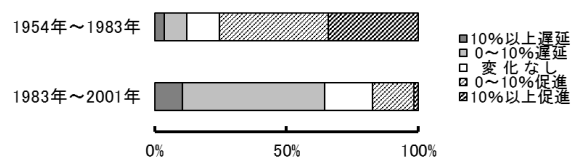


図1. 1954年から1983年および1983年から2001年の50%通過年齢の変化

領域ごとの変化では、「言語・社会領域」では、1954年から1983年も1983年から2001年も、「幼児期前半」「幼児期後半」「学齢期」とも、全体の変化とほぼ同様な項目の分布を示した。しかし、「認知・適応領域」では、1954年から1983年も1983年から2001年も、「幼児期前半」よりも「幼児期後半」や「学齢期」で変化が大きかった。

各検査項目の年齢別通過率の検討では、発達の促進が見られた項目で年齢別通過率の上昇、遅延した項目で低下し有意差を認めた。また、加齢に伴う通過率のグラフは、発達の

促進では左へ、遅延では右へ、傾きの変化はほとんど認めずに変移した。したがって、変化したのは子どもの一部でなく、全体の発達が促進または遅延してきていると考えられた。項目ごとの変化では、「色の名称」では発達が持続的に促進し、「折り紙」や「硬貨の名称」では持続的に遅延した。これは、発達課題により発達のバランスが変わってきている、ある意味でアンバランスになってきているものと考えられた。子ども全体の発達の变化や変遷はこれまであまり検討されてきておらず、今後、変化の原因や対応について検討が必要と思われた(図2、3)。

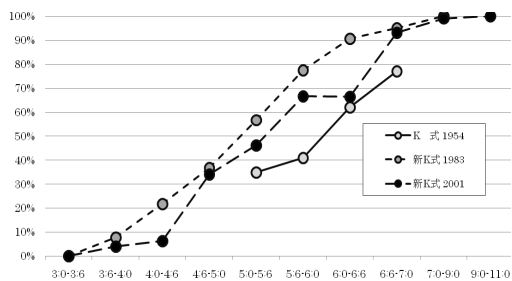


図2 「5以下の加算 3/3」の年齢別通過率

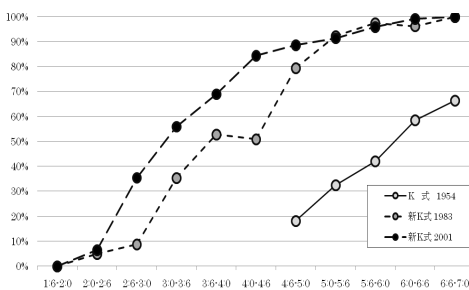


図3 「色の名称 4/4」の年齢別通過率

(2) 「新K式2001」の全領域発達指数(DQ)と「新版S-M社会生活能力検査」の社会生活指数(SQ)の値を図4に示し、男女別の平均値を表1に示した。新版K式発達検査による認知発達検査は男児と女児で差を認めなかったが、社会生活能力テストの結果は、女児が男児より発達が早いという性差を認めた。「新版S-M社会生活能力検査」は子どもの社会生活能力全般を評価する検査で、3歳頃からの課題として、身近自立では「衣服の着脱がひとりできる」、作業では「ハサミで簡

単な形を切り抜くことができる」、意思交換では「見たり聞いたりしたことを自分から話せる」、集団参加では「簡単な室内ゲームができる」、自己統制では「欲しいものがあったても、説得されればまんする」などが含まれている。意思交換、集団参加、自己統制などの項目は、発達障害児で未熟性が目立つものであり、健常幼児でも性差があるということでの結果は、「気になる子」や発達障害児が男児で多いことの一つの要因と考えられた。

表1 新K式2001の結果(DQ)と社会生活能力指数(SQ)
(平均値±標準偏差)

	D Q	S Q
男児	94.1 ± 11.7	88.4 ± 11.7
女児	96.3 ± 13.6	101.1 ± 16.0
全員	95.0 ± 12.5	93.5 ± 15.4

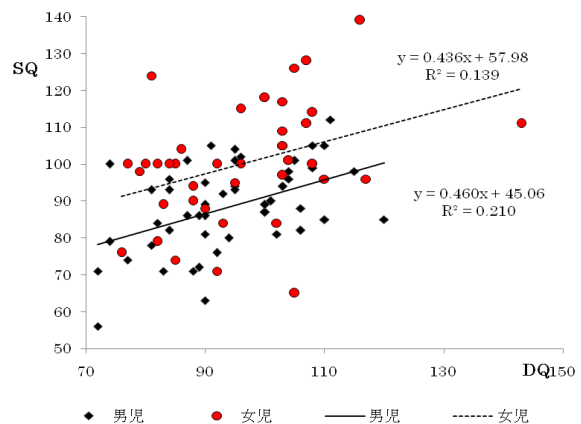


図4 保育園児の社会生活能力テストと新版K式発達検査結果

(3) ナイジェリアの幼児に人物画検査を行った結果、その発達の全体的傾向は我が国の子どもと変わりがなかった。しかし、5,6歳を過ぎるとその国の文化や民族性を表す描写が出てきた(図5)。

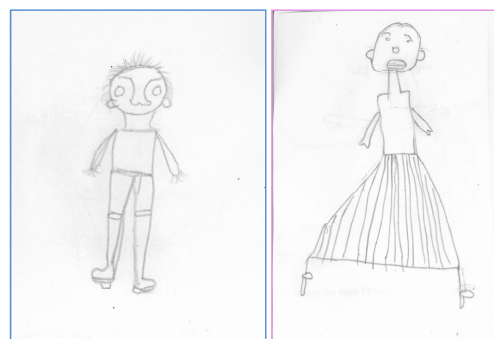


図5 ナイジェリアの子どもの人物画

(4) 生活習慣の調査では、現代の幼児は、朝食を食べないことや、テレビやビデオの時間が長い、23時以後の就寝のものも多いなどの特徴が明らかになったが、発達との関連は明らかではなかった。

(5) 簡易版幼児用発達評価尺度を作成し試行的に実施したが、今後性差も考慮しながら、今後の研究の課題にしていく予定である。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計13件)

郷間英世、大谷多加志、1954, 1983, 2001年のK式発達検査の標準化資料から検討した最近の子どもの発達像 - 子どもの精神発達の変化の全体的傾向 -、発達・療育研究(京都国際社会福祉センター紀要) Vol.29、2013、19-28

郷間英世、大谷多加志、牛山道雄、小谷裕実、落合利佳、池田友美、K式発達検査の標準化資料から検討した最近の子どもの発達像の変化 - 1954, 1983, 2001年の年齢別通過率を用いた項目ごとの変化の検討 -、京都教育大学紀要、No.123、2013、131-140

郷間英世、川越奈津子、立田瑞穂、中市悠、郷間安美子、鈴木万喜子、落合利香、最近の子どもの描画発達の男女差についての検討、京都教育大学紀要、査読有り、122号、2013、101-109

郷間英世、宮地友美、鈴木万喜子、立田瑞穂、中市悠、郷間安美子、保育園に通う幼児の生活習慣の検討、京都教育大学紀要、査読有り、第120号、2012、29-36

郷間英世、現代の子どもの発達の遅れとアンバランスさ、小児科、52巻1号73-80、2011

川越奈津子、郷間英世、牛山道雄、池田友美、郷間安美子、現代の子どもの描画発達についての研究 - 保育園幼児とグッドナイフ人物画知能検査による検討 -、小児保健研究、査読有り、70巻・2号、

2011、257-261

池田友美、永井利三郎、川上あずさ、牛尾禮子、眞野祥子、郷間英世、The sleep-wake rhythms of the physically disabled child、9th Congress of the European Pediatric Neurology Society、2011年5月11日、クロアチア

郷間英世、木下佐枝美、川越奈津子、中市悠、木村秀生、郷間安美子、現代幼児の人物画描画発達と気になる子の描画 - グッドナイフ人物画検査を用いた検討 -、京都教育大学紀要、査読有り、117巻、2010、63-71

小谷裕実「高機能広汎性発達障害児に対する保護者及び本人への診断告知の実際 - 沖縄県自閉症協会へのアンケート調査から -」、花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要、第5号、2011、29-38

小谷裕実「学校での支援、学校外での支援 - 医療の立場から -」『高機能自閉症・アスペルガー症候群の学童期・思春期の教育的支援 - 学童期・思春期における二次障害への早期対応と人格発達への発達支援 -』オープンリサーチセンター整備事業“臨床人間科学の構築” ヒューマンサービスリサーチ21編集・出版、2010、47-62

小谷裕実「特別支援教育と早期発見・早期療育 - その現状と課題」滝川一廣、小林隆児、杉山登志郎、青木省三編『そだちの科学 特集 発達障害の早期発見・早期療育』日本評論社、2012、44-49

池田友美、加藤久美、毛利育子、永井利三郎、谷池雅子、Sleep problems in physically disabled children and burden on caregivers、Brain and Development、査読有、34、2011、223-229

落合利佳、テレビとゲーム機の使用が小学生の生活に与える影響について、大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要3号、2013、23-353

〔学会発表〕(計9件)

Hideyo Goma, Takashi Otani, Noriko Sato, Hiroimi Kotani, Tomomi Ikeda, Changes in Children's Mental Development in Japan since 1954- An Analysis of Passing Rates on Developmental Items of the Kyoto Scale of Psychological Development -, 第14回世界乳幼児精神保健学会, エジンバラ、イギリス、2014、6、14-18

郷間英世、知能検査・心理検査、小児神経セミナー、大阪、2013、11、2-4

郷間英世、最近の幼児の発達のアンバランスさと発達障害、発達障害医学セミナー、京都、2014、3、15-16

郷間英世、医療と発達支援、第48回日本発達障害学会、東京、2013、8-24-25

Hideyo Goma, Reiko Ushio, Noriko Sato, Hiroimi Kotani, Tomomi Ikeda, A Study on drawing development of children with and without disabilities using Goodenough-drawing-test, 第9回ヨーロッパ小児神経学会、クロアチア、ドブロブニク、2011、5、11-14

池田友美、永井利三郎、川上あずさ、牛尾禮子、眞野祥子、郷間英世、The sleep - wake rhythms of the physically disabled child、9th Congress of the European Pediatric Neurology Society、2011年5月11日、クロアチア

郷間英世、健常児を含む子ども全体の発達の变化から発達障害を考える、第191回大阪小児科学会特別講演、2011、9、25

郷間英世、小谷裕実、池田知美、子どもの発達の経年的変化の検討、1955、1983、2001年のK式発達検査の標準化資料の分析から(2)第52回日本小児神経学会総会、福岡、4

池田友美、郷間英世、In-home medical care at night and burden on caregivers、IASSID Asia-Pacific 3rd Regional Conference、2013年8月22日、東京

〔図書〕(計8件)

郷間英世、「知能検査・心理検査」、日本小児神経学会教育委員会編、小児神経学の進歩、診断と治療社、東京、2015

郷間英世、最近の幼児の発達のアンバランスさと発達障害 新版K式発達検査の標準化資料の分析と「気になる子」の調査結果などから、郷間英世編、発達障害医学の進歩 No26 - 発達障害児の幼児期からの支援 -、診断と治療社、2014

郷間英世、第2章「子どもの心理、知能、情緒、社会性の発達とその保健」第6章「集団の保健」、澤田淳編、最新子ども保健、日本小児医事出版社、2013

郷間英世、最近の子どもは以前の子どもに比べて発達が遅れてきているか—新K式検査を用いて検討した現代の子どもの発達の問題点、松下裕、郷間英世編、新版K式発達検査法、発達のアセスメントと支援、ナカニシヤ出版、2012

郷間英世、特別な支援が必要な子どもたち、相澤雅文ら編、クリエイツかもがわ、2013

小谷裕実「本人への診断告知と支援」小島道生、田中真理、井澤信三、田中敦士編著『思春期・青年期の発達障害者が「自分らしく生きる」ための支援』金子書房、2013年1月29日、33 - 47頁

池田友美 他、風間書房、ケアリング研究へのいざない 理論と実践、2011、91 - 94

落合利佳、子どもの保健(落合利佳編)あいら出版、(編集および第1章 執筆)2012

(1)研究代表者

郷間 英世 (GOMA HIDEYO)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40234968

(2)研究分担者

小谷 裕実 (KOTANI HIROMI)

花園大学・心理福祉学部・教授

研究者番号：10294266

池田友美 (IKEDA TOMOMI)

摂南大学・看護学部・准教授

研究者番号：70434959

落合利佳 (OCHIAI RIKA)

大阪大谷大学・教育学部・准教授

研究者番号：80435304

(3)研究協力者

大谷多加志 (京都国際社会福祉センター)

鈴木万喜子 (京都教育大学)

中市 悠 (京都教育大学)

木村由里 (吉田山保育園)

郷間安美子 (京都国際社会福祉センター)

川越奈津子 (長浜市こども発達支援センター)